

広報芝浦

WINTER 2026.02

INSTITUTE OF TECHNOLOGY

S
H
I
B
U
A
I
N
S
T
I
T
U
T
E
O
F
T
E
C
H
N
O
L
O
G
Y



特集

彼女たちが芝浦工業大学に進んだ理由

「アジア工科系大学のトップ10」に向けた
ダイバーシティ推進の現在地



(表紙) 箱根駅伝復路8区を力走する駅伝部の横尾皓さん(環境システム学科4年)

芝浦工業大学で4人目の箱根ランナー誕生がしました。創立100周年記念事業である「駅伝プロジェクト」では新体制で箱根駅伝本選出場を目指しています。新体制での1年を終え、監督・コーチが1年を振り返りました。詳細は、10ページをご覧ください。



第一体育館お世話になりました記念イベント

「ありがとう 第一体育館 最後の思い出を一緒に」

2026年1月から解体工事が始まった大宮キャンパス第一体育館。1966年の大宮キャンパス開設以来、59年にわたり学生の学びと挑戦を支えてきた体育館に感謝を込めて、2025年11月に記念イベントが開催されました。記念試合や交流が行われ、世代を超えた思い出と未来への期待が刻まれた一日となりました。



広報芝浦

WINTER 2026.02

INDEX

04 [特集1]

「アジア工科大学のトップ10」に向けたダイバーシティ推進の現在地

彼女たちが芝浦工業大学に進んだ理由

08 [特集2]

第20回

高校化学グランドコンテストを開催

10 創立100周年記念10回連載

2027年・箱根に向かう新たな決意

— 駅伝部 監督／コーチ座談会 —

徳本監督×山川コーチ×岡田コーチ

14 SIT Academic Column

アフリカの建築遺産を通して、歴史的環境の保全と活用のあり方を探り、将来の都市像を描く

建築学部 / 建築史研究室
岡崎 瑠美 准教授

18 しばうら人 卒業生の「今」

建築の学びから始まり、地方政治の道へ。多彩なキャリアを支える建築分野の懐の深さ

那覇市議会議員 比嘉 啓登さん
工学部建築工学科 2009年3月卒業

20 ACTIVE STUDENTS! 活躍する芝浦工大の学生たち

工学部材料工学科4年 古賀 達也さん
空手道部

デザイン工学部デザイン工学科4年 櫻井 響来さん
工学部電気電子工学課程先端電子工学コース1年 東坂 柊哉さん
システム理工学部数理科学科1年 小林 樹さん

22 SITニュース





2026
WINTER



「アジア工科大学のトップ10」に向けた
ダイバーシティ推進の現在地

彼女たちが 芝浦工業大学に 進んだ理由



「アジア工科大学のトップ10」を目標に、ダイバーシティ推進先進校として多様性の確保に取り組む芝浦工業大学。女子学生比率30%という目標を掲げる中で、女子学生たちは、今どのような日々を過ごしているのか。リアルな声を通して、芝浦工業大学で学ぶ彼女たちの等身大の姿に迫ります。

—— 3人が理系進学を意識したのはいつ頃からですか？

池田 はっきりと理系に決めたのは高校2年の文理選択の時です。数学が得意だったことが、大きな理由になりました。

御厨 私も物理が好きだったので、理系を選びました。将来の目標より、得意科目をどう生かすかを意識していました。

池田 御厨さんは女子校出身ですが、共学校の出身者から見ると、女子校って文系のイメージがあります。理系を選びづらい雰囲気とかはないですか？

御厨 私の経験で言えば、女子校の方が理系を選ぶ女子が多いと思います。私の時は文理選択の割合はほとんど半々でした。

今村 私も都内の女子校でしたが、3〜4割が理系を選択していました。

御厨 今村さんはいつ頃から理系に進もうと考えはじめましたか？

今村 私は結構早くて、中学1年くらいから理系を意識していました。数学が好きで、社会科が苦手だったというのもありますが、中学3年の頃には「理系の方が就職に強い」といったメリットを考えていました。

国公立や総合大学と比較して
芝浦工業大学を選んだ背景とは

——そんな中で3人が芝浦工業大学を選んだ理由を聞かせてください。

御厨 私は近所に住んでいたのですが、芝浦工業大学を昔から知っていました。キャンパスが綺麗で、先進的な印象があり、他の大学と比べてもイメージが良かったです。

池田 理工系だとキャンパスの雰囲気や、研究施設が決め手になりますね。私は地元近くの国立大学に合格していたのですが、受験でキャンパスに行ったら結構古びた雰囲気で……。駅から遠いことなどもあり、ここには通えないなと考えて、上京する道を選びました。

——2人が高校生の頃はコロナ禍で、オープンキャンパスにはあまり行けない状況でしたね。

池田 ネットで大学を調べるのが中心でした。私は地元が三重県なので、実は芝浦工業大学のキャンパスに来たのは入学する時が初めて。国公立や総合大学も受験していましたが、理工系大学の方が、専門知識が身につくだろうという期待感がありました。

今村 私は海外で長く暮らしていて、中学生の頃から海外留学をしたいという思いが強かったです。留学制度が充実している点、

芝浦工業大学を志望した大きな理由です。システム理工学部の「国際プログラム」は留学先大学の学費が不要で、4年間で卒業できるのが魅力。総合大学も志望校の候補だったのですが、理系の学生を想定してない留学制度に違和感を感じて、芝浦工業大学を選びました。

御厨 私もMARCHレベルの総合大学を併願していましたが、両親からは「就職が強いから」と、芝浦工業大学をずっと勧められていました。当時は卒業後まで意識できませんでした。今になって就職に強い大学を選んで良かったと思います。

実践的な授業や研究活動で
社会につながる専門知識を磨く

——3人はそれぞれの学科で、どのような学びに取り組んでいますか？

今村 高校の探究活動でAIについて学ぶ機会が多く、情報系や電気系の分野に進みたいと思うようになり、電子情報システム学科を選びました。今はプログラミングを学んでいる時間がとても楽しいです。オープンキャンパスで話をした三好匠教授が今でも気にかけてくれていて、時折、研究室にお邪魔して

ます。
御厨 高校から大学の勉強が変わって、大変なことはないですか？

今村 演習などの実践的な授業が楽しい一方で、数学や物理の座学が少し大変です。けれど学習サポート室などのバックアップもあるので、無理なく授業にはついていけています。2人はどう学科を選んだのですか？

御厨 理工系の分野を調べる中で、興味が湧いたのがロボット分野でした。そこでロボットに関われる研究室を探して、電気工学科に決めました。

池田 私の場合は工学部という大まかなイメージがあり、とはいえ電気系には難しい印象がありました。そこで機械系の中から機械機能





工学科を選びました。
今思えば、少し感覚的な進路選択でしたが、研究室での研究も含めて、力学系の勉強を楽しんでいます。

—— 4年生の2人は卒業研究ではどんなテーマに取り組んでいますか？

池田 私は伝熱工学や流体力学など、まさに力学をテーマにする研究室に所属していて、液体の表面で発生する「マランゴニ対流」という対流の解析に取り組んでいます。

御厨 私は企業連携型の研究に取り組んでいます。道路工事などで路面のアスファルトを切断する機械があり、熟練者は音などで切断の状況を判断できます。その技能をコンピュータによって自動化し、熟練者でなくても作業ができる、操作支援システムの開発を目指した研究です。
今村 2人はどうやって研究分野や研究室を選んだのですか？

御厨 私は入学した時の「ロボットがやりたい」という思いを変わずも続けていて、関連する研究テーマを選択しました。

池田 私は研究室の小野直樹教授の人柄です。何を学ぶかも大事ですが、誰に教わるかを考えた時に、授業を受けて親しみやすさを

感じた先生を選びました。

今村 私はまだ具体的に研究したいテーマが思い浮かばなくて、少し不安もあるのですが。

御厨 まだ1年生だから焦らなくて大丈夫だと思います。2〜3年生になって専門科目の授業が増えてくれば、自然と楽しい授業、好きな分野が見つかるはずですよ。

はじめは不安に感じた環境も
今では居心地の良い場所に

—— 一般的には「理工系に女子が少ない」といったことが話題に上がりますが、理系に進学する時に不安はありませんでしたか？

今村 入試広報のスタッフとしてオープンキャンパスの「理工系女子ルーム」を担当した時にも、高校生や保護者の方々からは、そうした相談がいちばん多かったです。

御厨 私は中学・高校と6年間女子校だったこともあり、正直に言えば、入学までは気にしていました。東大宮駅からのスクールバスに乗った時は男子ばかりで少し驚きました。

池田 男子学生の多さには、私もはじめは驚きましたね。

御厨 所属している研究室も女子が少ないのですが、今ではまったく気にならないです。

池田 男子がみんな本当に優しいのは、女子学生でも過ごしやすいポイントだと思います。

今村 最近はオープンキャンパスでも女子高生参加者が増えていますよね。

御厨 これから女子学生はもっと増えると思いますし、すでに増えている実感もあります。

池田 芝浦工業大学にいますと、女子校出身者と会うことも多いですね。

御厨 私も女子校でしたが、多分女子校の方が、理系を選ぶ人が多いと思います。

今村 将来設計をしっかり考える人が多い印象があり、その点から就職力の強さに惹かれるのかもしれない。私も就職に強いというメリットで、理系や芝浦工業大学を選びましたから。

池田 就職活動でも、理工系の女子というだけで、企業の方の反応が良かった気がします。

御厨 私も内定式に行ったら、周りの男子は大学院生と高専出身者ばかりでした。

池田 私の会社も学部卒はほとんどいませんでしたね。

—— 2人とも大学院生と肩を並べて、内定を獲得したのはすごいですね。卒業後はどういった企業に就職するのですか？

池田 私は測定機器を扱う専門商社の営業職です。入試広報スタッフや塾講師のアルバイトをして、人と話すことが好きだと思うようになり、営業職を選びました。

御厨 私はシステムソリューション会社のシステムエンジニアになります。内定先のイン

ターニングポイントに参加した時に、コソコソと開発に取り組みより、営業と開発の技術的な橋渡しをしたと思ったことがきっかけです。

今村 私は将来が全然イメージできていないので、先輩たちのように、早く自分自身が納得できるキャリアの目標を見つけないです。

新しい環境で新しい価値観に出会えたことが成長の後押しに

—— SNS などでは「理系は文系より忙しい」「男子だらけで大変」という話も出ますが、実際に芝浦工業大学に通ってどう思いますか？

今村 私は留学、ビジネスコンテスト、課外活動など授業以外にもやりたいことに挑戦できて、充実した時間を過ごしています。むしろ色々詰り込みすぎて、少し忙しいくらいです。

池田 私もアルバイトもできていますし、芝浦祭実行委員会や入試広報スタッフの活動にも参加しています。理工系の大学だから特に忙しいということは感じません。

御厨 もちろん忙しい時もあ



るけれど、ゆとりがある時期もあり、しっかりキャンパスライフを楽しめています。

池田 もうすぐ卒業ですが、やり残したことはないと感じられるほど、勉強もプライベートもキャンパスライフを満喫できました。

御厨 私は中学・高校と6年間女子校に通ってきた、理工系の大学でまったく違う価値観の人たちに出会えたことが、すごく楽しかったですし、自分のためになったと思います。そういう意味でも、理工系に進んだことが正解でした。

池田 私は地元の三重から出てきて、はじめは東大宮に住んで、その後、勝どきに。一人暮らしで人間的にも成長できたので、地元の国立大学にこだわり過ぎなくて良かったと感じています。

今村 私は比較的女子の友達と一緒にいることが多いのですが、男子学生と分けて隔てなく仲が良い女子もいますし、女子だけで大学生生活を過ごすこともできます。高校生が心配する気持ちも分かりますが、想像よりきつと自分らしく過ごせる環境のほず。先入観をもたずに一度大学に足を運んでもらいたいです。

Profile



今村 梨世 さん

工学部 理工学部 電子情報システム学科1年

東京都・文京学院女子高等学校出身。シンガポール生まれ。幼稚園から小学校の途中まで台湾で過ごし、その後、神奈川に暮らしながら東京の女子校に通う。芝浦工業大学には理工系女子特別入学選抜で進学し、電子情報システム学科の「国際プログラム」に在籍。大宮キャンパスの生協食堂がお気に入り。



池田 晶 さん

工学部 機械機能工学科4年

三重県立伊勢高等学校出身。地元の三重県から、大学進学を機に上京。芝浦工業大学には一般入試で入学。地元近くの国立大学にも合格していたものの、研究施設やキャンパスに魅力を感じて芝浦工業大学へ。大学のオススメスポットは、焼きたてパンを提供する大宮キャンパスの「芝浦ベーカリー」。



御厨 沙良 さん

工学部 電気工学科4年

東京都・富士見高等学校出身。豊洲キャンパス近くに住んでいて馴染みのあったことや、周囲のアドバイスもあり芝浦工業大学を受験し、一般入試で入学。企業連携の卒業研究に取り組み、卒業後は大手グループ企業のシステムエンジニアに。友達と集まる時は、豊洲キャンパス本部棟4階が定番スポット。

第20回 高校化学 グランドコンテストを開催



芝浦工業大学が主催する「高校化学グランドコンテスト」の最終選考会が2025年10月25日、26日に豊洲キャンパスで開催されました。

高校化学グランドコンテストは、「化学の甲子園」とも称される全国規模の化学イベントです。最終選考会には、第1次審査を通過した全国66校115チームの高校生が参加し、研究成果を発表しました。2日間で延べ約1000人が来場し、会場は大いににぎわいました。

1日目に行われたポスター発表では、各校の生徒たちが研究成果をまとめたポスターを前に、他校の生徒や審査員の先生たちへ熱心に説明していました。審査員からの貴重なアドバイスを受けるだけでなく、高校生同士がより良い実験手法について意見を交わす場面も見られ、活発な議論が展開されました。また、会場には協賛企業によるブースも設けられ、参加者は日頃学んでいる化学が社会とどのようにつながっているのか



を学んでいました。

2日目の口頭発表では、第1次審査を通過した10チームが研究成果を発表しました。審査員をはじめ会場から多くの質問が寄せられ、生徒たちは鋭くも温かい問いかけに的確に回答していました。さらに、東京大学特別教授・信州大学特別名誉教授の堂免一成先生による、「太陽光から直接水素をつくる光触媒とは？」をテーマとした特別講演も行われました。受賞した上位3チームには、海外の国際フォーラム※への参加支援が行われます。

※シンガポール：「International Science Youth Forum (ISYF)」
台湾：「Taiwan International Science Fair (TISF)」

受賞者一覧

賞	学校名	チームメンバー(講演要旨著者)
	研究タイトル	
文部科学大臣賞	東京都立日比谷高等学校	長坂ソフィア怜・福武幸之助・橋本講師・佐藤守俊
	ドラッグ・リポジショニングを活用した遺伝子操作技術の開発	
化学未来賞	静岡北高等学校 科学部水質班	上野真央・望月俊・内田朱音・能城凜・佐伯穂高・小澤一毅
	安価な自作蛍光光度計によるリチウムイオンの定量法の開発	
化学技術賞	兵庫県立宝塚北高等学校 化学部	高野悠惺・下村隼舞・高橋夢南・波田崇陽・近藤ななみ・宇野遼太郎
	天然多糖類を用いた固体二次電池の開発	
審査委員長賞	福井県立藤島高等学校 課題研究チーム	堀陽向・中村秀
	高濃度溶液における凝固点降下	
審査委員特別賞	灘高等学校 化学研究部	亀山凜誠・矢治文哉・熊谷太雅
	アントラセン誘導体の9,10位への導入基と溶液中での消光に関する考察	

講評

高校化学グランドコンテスト実行副委員長
山本創太教授

今年も最終選考会では熱く深い化学談義が交わされました。初日にはポスターの前に立ち熱弁を振るうばかりでなく、協賛企業ブースで先端的な科学技術に興奮する高校生たちの姿がありました。これには審査員・協賛企業各社の皆様から大変刺激になった、との声をいただきました。今回からはポスターにも協賛企業賞が贈られるようになり、高校生にとってはさらに参加モチベーションが高まることとなったと思います。また、例年お招きしているシンガポール・台湾からの招へい参加チームだけでなくタイからの参加者もあり、2日目の口頭発表では全チームが英語での発表に果敢に挑戦するなど、グラコンのますますの国際化が進む様子が見られました。グラランドアワード表彰3チームは、シンガポール・台湾でのサイエンスフェアに参加します。派遣チームの海外での活躍のご報告を楽しみにしております。今後も皆様のご支援、ご協力を賜りたくよろしくお願い申し上げます。



2027年・箱根に向かう新たな決意 — 駅伝部 監督／コーチ座談会 —

2018年にスタートした創立100周年事業「駅伝プロジェクト」。7年目を迎えた2025年より、駿河台大学を箱根駅伝初出場へと導いた徳本一善監督をはじめとして指導体制を刷新。新体制1年目に予選会記録を更新するなど、箱根を目指す夢は新たなステージに突入しました。2027年の本選出場を掲げる駅伝部の取り組みについて、ここでは監督／コーチの座談会を通してお伝えします。



徳本 一善 監督

法政大学社会学部卒業、順天堂大学大学院修了。日清食品グループ陸上競技部プロ契約選手(2002～2011年)、モンテローザ陸上競技部(2012年)、駿河台大学陸上競技部駅伝総監督(2012～2024年)。



山川 達也 コーチ

中京大学体育学部卒業。麗澤大学陸上競技部コーチ(2010～2016年)、同監督(2017～2024年)。



岡田 拓也 コーチ

法政大学経済学部卒業。流通経済大学陸上競技部駅伝ヘッドコーチ(2019～2021年)、専修大学陸上競技部コーチ(2022～2024年)。

本気で箱根を目指す
 意識改革を始点にして

— 2025年10月に行われた東京箱根間往復大学駅伝競走(箱根駅伝)予選会では、過去最高となる18位を記録。芝浦工業大学駅伝部の新体制として1年目を終えましたが、現時点での手応えをまずはお聞かせください。

徳本…目標だった15位は叶わなかったものの、昨年までの予選会の記録を更新し、関東学生連合チームでの出走も達成できました。予選会では主力2人を欠きましたが、及第点だと評価できる結果です。

山川…約半年間でなんとかここまでたどり着けたと、まずはホッとしたのが本音です。ただし本選出場という大目標に向けた課題が山積しているのは間違いありません。

岡田…新体制になって短期間で課せられた結果を出せたというのは、2人が話したとおり。これまでのコーチ経験と比べても、このスピード感は計り知れないと感じます。

徳本…監督に就任した当時は、部員の練習への向き合い方など、あらゆる姿勢が、想像以上に未熟でした。



©Getsuriku

しかしこの状態で逆に予選会23位という結果を出せていることに驚きもあった。選手の意識と実績のギャップは、ある意味でプラスに受け取れる材料でした。

——選手の意識について、当初から大きな課題として捉えていたそうですが。

山川：練習や生活面を見て、「これは23位のチームだな」と感じた一方、新体制になって2週間ほどの4月に開催された5kmのロードレースでは、23位という実績には見合わない選手を見つけたことができた。しっかりと積み上げていけば面白いんじゃないか、という手応えを掴みましたね。
岡田：そうですね。私もその時に期待が芽生えたことを覚えています。一人ひとりの気持ちをどう変えられ

るかが、最重要課題になると思いました。

徳本：取り組んだのは「君たちがここにいる目的は？」という、箱根駅伝を目指す初歩の意識づくりからです。その意識がないなら、この場所にいるのはおかしいと、明確に示しました。大きな目的を果たすためには私たちも鬼にならなくてはいい。結果として出場できた・できなかったというのは仕方のない面もありますが、そのためにやりきったんだという評価を、選手も指導者も支援者の方々も掴めるかどうか。そのために挑戦する大切さを、今でも選手に説き続けています。

——目的を明確にしなければ、そのためのプロセスは見えませんか。

徳本：スケジュールや練習方法など、箱根駅伝出場という目的から逆算してプロジェクトは組まれています。選手も大学からの支援を受けており、その一員として果たすべき役割を当然理解してもらいます。学生であっても結果を掴んでこそ得られる環境があることを認識することが大事なのです。

山川：監督がこういう話をし続けてくれたので、コーチとしてはその熱

をいかに選手間に広げるかが大事でした。

岡田：弱音も含めた選手の言葉は、監督の前にまずコーチに届きますから。そこで1軍・2軍の偏りなく、時間をかけて伝えていく。監督も山川コーチも言葉が力強いタイプなので、私は選手をフォローすることを意識していました。

——お話を聞いているとチームマネジメントとして、まずは骨格づくりに取り組んでいる工程ですね。

徳本：特別なことや複雑なことを求めている訳ではないですね。目的が何なのか、そこに向けてチームが進むために、自分の立場で何をすべきかを理解することが必要だという話を、選手だけでなく、マネージャーやコーチ陣にも伝えていきます。

『文武両道』を チームカラーに掲げる

——新体制での役割分担は、どのように組み立てられているのでしょうか。

岡田：私は2軍の指導を主に担って

います。現状では1軍のメンバーに穴が空いた時、2軍の選手で埋めるには格差がある状態で、1軍を支えられるレベルに選手を押し上げることが私の役割ですね。

山川：私は指導に加えて、選手の情報や監督と共有するなど、監督と選手の橋渡しを行う機会が多いです。さらに重要な役割がスカウト活動です。高校や大会への視察の中心的役割を担っていて、そこで駅伝と学業を両立できる高校生を獲得することが、チームの将来を左右する責務になっていきます。

徳本：スカウトでも3人がそれぞれ違う人脈をもって、指導でも2人のコーチは私にはない素養もっています。例えば私はトラブル処理の能力が高い一方で、山川コーチはトラブルを事前に察知する能力に長けている。岡田コーチには私がストレッチを感じる業務を主に手伝ってもらっていますが、そこは法政大学の先輩と後輩という立場もありまして（笑）。

一同…（笑）



——徳本監督は選手指導だけでなく、大学との連携、対社会や支援者の方々も視野に入れてプロジェクト全体を前進させるゼネラルマネージャー（GM）のような役割も担っています。

徳本…そうですね。箱根駅伝に出場するチームの監督は主に、選手と向

き合って指導に集中する職人気質の方と、上層部との連携などのマネジメントも手掛けるGMタイプに分かれます。私は後者で、大学にビジョンを提示し、そこに至るプロセスを自ら構築していくスタイルは、チーム運営での強みになっています。

——GMとしての見方で、芝浦工業大学独自のチームカラーをどのように描いていくイメージでしょうか。

徳本…『文武両道』という言葉に尽其でしよう。駅伝も学業も妥協なくやっていくんだという選手の意志を尊重した理由も、それがチームの特徴であり武器になると判断したから。競技を引退した後も、学んだ知識で社会に貢献できる人を育てていくことは、我々もブレずに取り組んで、選手がその障壁を乗り越えていく過程を、広く発信していきたい。こうしたチームカラーは、将来有望な選手を獲得する求心力にもなるはずですよ。

山川…はじめは勉強を練習しない言い訳に使っていた選手もいたけれど、監督が説き続けたことで、両立の意識もだいぶ浸透してきましたね。

徳本…両立を目指すを決めたのだから、少なくとも挑戦する姿勢は見せ

てもらおう。できないと言わずならば、その先の結論は言うまでもないと。

岡田…こうした姿勢も、今まで通りじゃいけないんだ、という選手の意識づくりです。予選会などで結果も伴ってきたことで、段々と選手の納得感も高まってきたと思います。

徳本…チーム運営としては1年目から2年目への移行も大切ですが、予選会という山場を越えて、弱いチームはそこで気を抜いてしまうもの。本気で箱根を目指すチームは、予選会が終わった瞬間から、1年間また積み上げていく意識をもっている。そこはまだまだチームの改善点ですね。

——その予選会について、改めて結果を振り返っていかがでしょうか。

徳本…主力2人を欠いたのが、実はかなり痛かった。その結果、目標15位に対して18位ですから、層の薄さが明らかになりました。また1年目は練習よりも意識改革を重視し、そこに時間を要したことは否めません。ただし来年の予選会では確実に15位以内は掴まなくてはいけない。それが2027年の本選出場を叶えるための必須条件だと捉えています。

山川…4年生の内山壽頼と横尾皓が抜けた後の大きな穴を、来年度どう



埋めるかも肝心です。スカウトした新入生は即戦力とはいかないまでも、前任校では獲得できなかったレベルの選手を何人か見込めています。

岡田…その上で現在の1〜3年生のレベルをさらに引き上げていきます。まだ調子のブレがある選手も多いですから、基礎固めから長期的に取り組んでいく必要があります。

本選出場のために 今、成すべきことは

——1年目に取り組んだチームの意識改革に加えて、本選出場に向けて、チームが補うべきポイント、そのための施策をどう考えていますか。

岡田…私は前任校の専修大学でコーチを務め、箱根駅伝に2回出場しました。伝統校や強豪校にもプレッ



シャーがかかる状況で、勢いを増す新興大学も登場している。本選出場のハードルは、一層厳しさを増しているのが現状です。

徳本…そこで補うべき要素として浮かぶのが、ゲームチェンジャーとなるエースの存在。他大学のエースと渡り合うためには1万メートル27分台のタイムが求められます。私たちのチームにポテンシャルのある選手がいたとしても、現時点では「27分台を目指そう」といっても選手は現実味を感じられないでしょう。それを「自分たちでもできるんだ!」というマインドに変えていくことが必要です。

山川…そうした練習に食らいつける選手を増やすために、部員数の拡大も不可欠です。来年度に入部する選手たちは、新体制で掲げたビジョン

や指導環境を理解して入ってきますから、意欲的に練習に取り組み選手が増えてくれるはずですよ。

徳本…そうした環境変化に伴って、選手が自己管理をしながら、主体的にトレーニングを行えるように変わっていきたい。例えば1日10本という練習メニューに対して、7本しかできなかった選手が、練習をブラッシュアップしながら継続的に9本できるようにしていく。そうした選手が増えれば、10本を走れる選手が3人しかない状況が、3か月後に6人になるかもしれない。

岡田…練習意欲や継続力、トレーニングの知識、自己管理能力が求められますが、根本的にはとてもシンプルな話です。ただしこうした取り組みができる選手とできない選手、現時点では結果にもプロセスにも顕著に差が生まれています。

徳本…個々人だけでなく、チームとしての成果を成功体験として共有し、選手の意欲に変えていく。選手が練習で何をすべきかを考えやすくするため、練習方針をシンプルに言語化することを常に意識しています。

——理工系大学として初の箱根駅伝出場を果たした時は、社会からも大きく注目されるでしょうね。

徳本…箱根駅伝に初出場すると、とんでもないことになる、というのが私は前任校で体験していますから。芝浦工業大学でもその体験を、というイメージがモチベーションになっています。選手たちにもその景色をぜひ味わってもらいたい。

岡田…ただし箱根駅伝への出場は決してゴールではなく、また新たなスタートになるでしょう。出場できたらより上位を目指せるように、次はシードを獲得できるようにと、高い目標に向かっていけるチームにしたいです。

山川…私は前任校で監督として予選会の次点を2度経験していて、絶対に次こそはという想いがあります。今はこのチームでどこまで行けるのかを楽しみながら、積み重ねてきたものを証明したいと考えています。

徳本…芝浦工業大学の方々は箱根駅伝出場に向けて大きな熱意をもって取り組んでいて、私たちもこれまでにないやりがいを感じています。大学のために、大学に関わる多くの人のために、という強い想いのものと、駅伝部への支援に対する感謝を、2027年の本選出場という結果で示してみせます。

芝浦工業大学で4人目の箱根ランナー誕生!!

2026年1月2日、3日に開催された第102回東京箱根間往復大学駅伝競走(略称…箱根駅伝)で、横尾皓さん(環境システム学科4年)が関東学生連合チームで復路8区(平塚〜戸塚21・4km)に出走しました。横尾さんは、1時間5分28秒(区間順位14位相当)の力走を見せて本学で4人目の箱根ランナーとなりました。沿道には教職員・学生・保護者・卒業生をはじめ、多くの大学関係者が応援に駆け付け、本学として3大会ぶりの箱根ランナーの誕生に声援を送りました。

”
アフリカの建築遺産を通して、
歴史的環境の保全と
活用のあり方を探り、
将来の都市像を描く

建築史研究室の研究テーマは、過去と未来をつなぐ建築遺産の保存と活用だ。国内外の建築遺産とそれを取り巻く環境を対象に、空間的特質と人々の利用や記憶、建築と暮らしの関係に、実測や文献調査、インタビューなどを通して「歴史ある建築や都市をどのように評価し、未来へ受け継いでいけばよいか」を検討している。担当教員である岡崎瑠美准教授はアフリカの建築遺産を研究対象とし、人口増加や経済成長に伴い急激な変化を遂げている都市における「遺産の意味と可能性を探究する。

mic Column

建築学部／建築史研究室
岡崎 瑠美 准教授



PROFILE

博士(学術)。慶應義塾大学大学院博士課程修了後、同大学助教、フランス国立科学研究センター訪問研究員、坂茂建築設計スタッフなどを経て、2021年に芝浦工業大学建築学部准教授に着任。建築史・建築遺産保存を専門とし、特にエチオピアなどアフリカをフィールドに歴史的環境の記録・保存・社会的持続可能性を探究研究を推進。国内外の学会での業績・表彰を有し、文化遺産国際協力コンソーシアムや日本・アフリカ大学連携ネットワーク(JAAN)の委員も務める。



歴史と文化が非常に濃い アフリカ・エチオピアの建築

岡崎瑠美准教授は、親の転勤に伴い高校まで日本、アメリカ、ドイツで生活し、各地の都市や建築に触れる中で、その背景にある多様な文化や歴史、人々の暮らしとの関係に強い関心を持つようになった。ドイツの高校を卒業後、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）に進学すると、大学1年次から建築史研究室に所属。歴史都市や建築遺産のフィールドワークに参加したことをきっかけに、建築を通して社会や歴史を読み解く面白さを実感し、建築史を専門に研究するに至った。

「建築史を含む建築学の魅力は、その学問領域の幅広さにあります。家具のような身近なスケールから、都市や環境問題といった大きなスケールまで、多角的な視点で物事を捉えることができるからです。また、技術、デザイン、歴史、社会など、複数の分野を横断しながら課題に取り組める点も、建築学ならではの面白さだと思います」

学部時代から博士課程まで、岡崎准教授はアフリカの建築遺産を対象に研究を行ってきた。アフリカには高校時代から興味を抱いており、大学に進学するにあたって、アフリカと建築の両方を扱う研究室があり、かつ9月入学が可能なSFCを選択したという経緯がある。

「大学1年生の時に初めてアフリカを訪れて、さまざまなカルチャーショックを受けました。当然のことながら、今まで自分が生活していた日本や欧米とは環境も人々の考え方もまったく違うのですが、他方で意外な共通点があっ

SIT A c a d e





たりもする。特に私が研究対象にしているエチオピアは約80の民族が暮らしていると言われる多民族国家であり、多様な文化的背景をもつ人々が共に暮らす社会や都市のあり方を考える上で、興味深い点が多く見られます」

岡崎准教授がエチオピアを研究対象に選んだのは、大学時代に所属していた研究室での学びをきっかけに、フィールドワークや実測調査の経験を通して、その魅力に惹かれていったからだという。

「エチオピアは、初期人類アウストラロピテクスの化石として知られる「ルシー」

シー」が発掘された、人類史研究においても重要な国です。4世紀頃にはキリスト教が入ってきているので、教会建築にも歴史があります。かつエチオピアは、ヨーロッパの帝国主義列強による植民地支配を受けずに独立を維持した国なので、独自の文化も色濃く残っており、世界遺産の数もアフリカ諸国の中でもっとも多い。人口は日本とほぼ同じですが、国土は日本の約3倍あるため、それぞれの地域の環境に適応したバラエティ豊



mic Column

かな建築が見られます。いわば、歴史と文化が非常に濃い」

時代とともに変化する
“遺産”の意味と可能性を探究したい

現在、岡崎准教授は都市や建築がどのような歴史的背景のもとで成立してきたかを調査し、その特徴を明らかにするとともに、将来どのような都市や建築を次世代に残していくべきかを考えている。そのために、文献調査に加え、現地での建築実測や住民へのインタビューを行い、急速な人口増加や経済成長が見込まれるアフリカにおける文化遺産の価値と可能性を探っている。

「私が研究においてもっとも大切にしているのはフィールドワーク。すなわち現地に足を運び、実際の建築に触れ、そこに暮らす人々の声を直接聞くことです。インターネットで多くの

情報が得られる時代ですが、現地の環境に身を置かなければ分からないことは無数にあります。特に建築の研究では、空間のスケール感や素材感、音や匂いなど、五感で体感することが非常に重要です」

アフリカを研究対象と





する研究者は、決して多くはないという。しかも、文化人類学や歴史学ならまだしも、建築学となるとその数はぐっと絞られ、当然、地域をエチオピアに限定すればさらに少なくなる。

「よく『なんでわざわざアフリカまで行って調査するのか?』と聞かれるのですが、誰もやっていないからこそ、やってみることに面白みを感じています。現地の研究者と協力しながら初めて実測する歴史的な建築もたくさんありますし、あまり研究がなされていないかつぶん、調べれば調べるほど新しい発見があり、貴重な情報が得られます」

仮に情報の少なさからアフリカの建築に光が当たりにくいという側面があるとするならば、岡崎准教授が現在進行形で行なっているフィールドワークには大きな価値がある。研究者としての展望については、次のように語る。

「今後は、従来の枠組みにとられない新しい建築史研究や、文化遺産のあり方について考えていきたいです。文化遺産には有名なモノUMENTだけでなく、日常的な建築や風景も

SIT ACADE



含まれます。日本では人口減少や空き家問題が進む中で、文化遺産をどのように維持、継承していくかが課題になっています。また、自然災害や紛争による被害、いわゆる「負の遺産」との向き合い方、三次元記録などの新技術の活用も含め、時代とともに変化する遺産の意味と可能性を探究していきたいです」

岡崎准教授が建築史研究室の担当教員を務めるようになったのは2021年からで、学生たちとは「議論を通して共に学んでいる感覚がある」という。学生たちの進路もさまざま、都市開発のコンサルティング会社に就職する人もいれば、行政機関やゼネコンに進む人、あるいは博士まで進む人もいる。

「学生の皆さんには、ぜひ世界に出て、多様な価値観に触れてほしいです。本学には多くの留学制度や国際交流を支援する仕組みが整っているので、そうした制度を積極的に活用し、実際に現地を訪れて人や文化と向き合う経験を重ねてください。異なる環境で得た気づきは、専門分野の学びを深めるだけでなく、将来さまざまな場面で大きな力になるはずですよ」



しばうら人

創立以来10万人を超える
芝浦工業大学の卒業生。
現在も日本はもとより
世界各地で活躍しています。
エンジニアはもちろん、
さまざまな方面で活躍する
卒業生を紹介します。

2009年に工学部建築工学科（当時）を卒業後、大学院を経て総合会社に就職。さらに松下政経塾で学び、現在は地元沖縄で市議会議員を務める比嘉啓登さん。多彩な経歴の持ち主だが、そのキャリアの変遷を伺うと一貫して市井の人々に向き合う姿勢が見えてくる。



PROFILE

比嘉 啓登さん

Hiroto Higa

那覇市議会議員

工学部建築工学科 2009年3月卒業

建築の学びから始まり、地方政治の道へ。 多彩なキャリアを支える建築分野の懐の深さ

大学のフィールドワークが
キャリアの原点

自然豊かな沖縄で生まれ育ち、都会へのおこがれもあって芝浦工大に進学しました。建築工学科を選んだのは、建築物を見るのが好きだったため。特に沖縄は、ファサードや建材に特徴的な建物が多いため、他の地域との違いを興味深く感じました。模型づくりなどものづくりも好きでしたし、スーパージェネコンや大手工務店に多数の卒業生を輩出している芝浦工大は「就職に強い」という好印象もありました。

入学後は全国各地出身の友人がたくさんでき、異なる価値観を知る機会がふんだんにありました。芝浦祭実行委員会に所属し、4年間活動したことで多くの仲間ができたことも、学生生活を充実したものにしてくれました。

学業面では建築のさまざまな領域を幅広く学びました。1年次に講義を聞きながらドラフターでの製図を経験した時、いかにも建築学らしい作業に心が躍りましたが、早い段階で「自分は意匠に向いていない」

と自覚することに。構造計算では座屈のモーメント計算がなかなか理解できず、計算式を丸暗記して試験に臨んだことも。いちばん好きだったのは都市計画で、3年次からは大内浩教授の地域政策研究室に所属。フィールドワークでは現地の地域振興策や商店街の活性化計画などを調べ、役所の担当部署に足を運び、商店街の皆さんの生の声などをお聞きして回りました。那覇市議会議員として日々私が取り組んでいるのも地域の繁栄や生き生きと暮らせる街づくりですので、学生時代に学びの中で行っていったことをまさに今、政治の舞台で実践していることになります。



大学では仲間たちとともにたくさん学びました

インドネシアで政治が 地域に与える影響力に驚嘆

大学卒業後、大学院を経て三井物産株式会社に入社しました。リーマンショック後の就職氷河期で、芝浦工大の卒業生が多いスーパーゼネコンや不動産会社は採用人数が少なく、「総合商社なら投資型インフラに関われるかもしれない」と考えての選択でした。入社後は、米国で鉄道貨物の動産リースの事業管理を1年間経験。その後はアジア担当として、インドネシア、インド、台湾などのプロジェクトの生産管理に携わり、ここでも芝浦工大での学びが大変役に立ちました。

例えば、プロジェクトの工程管理に用いられるガントチャートは、基



商社時代、多くの関係者がいる大型プロジェクトにやりがいを感じました

礎科目の「生産管理」で学んだ記憶があり、「とても大切なことを教えてもらったんだ」「もう一度勉強し直したい」と思いました。インドネシアの空港線プロジェクトで現地政府に提案する際には、PPP（官民連携）を進めるべきか、PFI（民間資金を採り入れる公共工事）を進めるべきか、建てつけから考える必要がありました。これも大学の授業で学んでいたためスムーズに取り組むことができました。ちなみに、議員活動でもPPPやPFIに関わる機会が少なくありません。

商社時代にもっとも印象に残った案件は、ジャカルタ地下鉄プロジェクトです。後に大統領になったジョコ知事が大胆な政策を打ち出して都市が急激に変化していく姿を目の当たりにし、政治が地域に与える影響力の大きさに圧倒されました。この経験がきっかけとなり、28歳で会社を退職して松下政経塾へ。2年半にわたり、座学と現場でみっちり鍛えられました。卒業後にキャリア採用で三井物産に再入社し、地域ブランディング事業に携わりましたが、政治の力による地域活性化を地元・沖

縄で実現したいという思いが徐々に強まり、2021年に退職。34歳で那覇市議会議員に当選し、今に至っています。

松下政経塾時代、国内海外で学び、沖縄県知事から薫陶を受けました



議会活動、現場目線で市民福祉の向上にむけて取り組んでいます



自らのアイデンティティ・ 沖縄の未来のために

大学入学時には自分の将来像が見えていなかった私ですが、どこで何をしたいも自分のアイデンティティは常に沖縄にあり、卒業論文のテーマも「観光資源としての沖縄・首里城の課

題」。どうすれば地域活性化に貢献できるのか。より暮らしやすい都市環境を実現できるのか。自分の視線の先には、やはり沖縄の未来、そこに暮らす人々の姿があります。さらに、大学のフィールドワークで訪れた東京・月島の商店街。豊洲キャンパスへの自転車通学中に見て回った下町の風景。芝浦祭実行委員会でお会いした商店主や地域の方々。現在、私は議員活動と並行して中小企業診断士としても仕事をしており、沖縄の地域企業や商店主の方々と接する機会が多いのですが、大学時代から一貫して同じ方向を向いていた気がします。

最後に、大学時代の思い出を一つ。2年次に男性誌『メンズノンノ』の専属モデルに選ばれ、卒業前までモデル活動を続けました。ファッション好きの同級生と相談し、大宮キャンパス近くの中原荘という芝浦工大生が多く住むアパートで応募写真を撮影したことが懐かしく思い出されます。アルバイト感覚の雑誌モデルでしたが、沖縄から飛び出して東京でしかできない経験を積むことができ、楽しかった学生生活の1ページとして今も記憶に鮮やかです。

ACTIVE STUDENTS!

活躍する芝浦工大の学生たち

最先端の共同研究と
弓道部の牽引

共同研究と部活動の両立

ひたむきな努力と集中力

工学部材料工学科4年

古賀 達也さん



「熱中」できるものに向き合い、
文武両道を実現する

芝浦工業大学工学部材料工学科4年生の古賀達也さんは、マルチスケール固体力学研究室（荻谷義治教授）に所属し、半導体材料の疲労破壊の研究に取り組んでいます。企業との共同研究であり、企業の方が求めるデータや結果を自分の手で揃えて報告するなど、実社会で本当に必要なことに貢献できることに強い達成感と楽しさを得ているといいます。

一方で、古賀さんの大学生活のもう一つの柱が弓道部での活動です。弓道の持つ「静かで神聖な雰囲気」に惹かれ、未経験ながら入部。研究室と練習場がそれぞれ別のキャンパスにある環境でありながら、4年生の11月まで活動を続け、自身の成長だけでなく部員全体の士気と技術を高め、3部リーグへの昇格に導きました。

未経験からのひたむきな努力で全国レベルへ

高校生までは、弓道はもちろん、他の武道なども経験がなかった古賀さん。経験者との差を埋めるため、毎日

「考えながら練習する」というスタイル。様々な日々を過ごしました。大宮キャンパス近くの国際学生寮に住んでいたこともあり、学業の多忙な時期でも部活動とのバランスを調整しやすい環境にも恵まれ、着実に腕前を向上。3年次には大会で上位を狙える実力がつき、部の主将も務めました。さらには、合格率約10%という難関である四段を、部内で唯一取得しました。

4年次の全国大会個人戦では、約4000〜5000人中上位8%という狭き門を突破して決勝に進出。通常よりも小さい的に連続かつ正確に的中させるなど、他大学からも一目置かれる存在へと成長しました。

研究と部活を両立させた、ここ一番の「集中力」

4年次の夏は研究と部活動の最終盤が重なり、非常に苦労したといいます。この難局を乗り越えられた要因として、古賀さんは、自身の裁量で研究を進められるという研究室の風土と、弓道で培った体力や集中力を挙げています。共同研究先への報告と、部活動の遠征や試合の時期を把握した上で、研究成果を事前に蓄えておいたり、後

から追い上げたりして調整するなど、メリハリをつけることで双方の活動を支障なく実現しました。短期間でも集中して最大限の成果を生み出す姿勢は、弓道によって培われたものでした。

大学で見つけた「熱中」は卒業後も

卒業後は、第一志望であった航空機の整備会社へ就職予定。弓道については、「個人戦で形のある結果を残せなかったことに悔いが残っているため、就職後も継続したい」と想いを述べてくれました。また、卒業する前には、大学生が受けられる最高段位の五段取得にも挑戦したいといいます。

最後に、4年次まで部活動と研究を両立することについて後輩へのメッセージを求めると、「体力的にも精神的にもきつかったため、手放しておすすめはできない。しかし、限られた大学生活でこれほど熱中できるものに出会うことができ、没頭する時間を過ごせたことは個人的にはよい経験だった」と語ってくれました。弓道で磨いた集中力と忍耐力を胸に、今度は仕事との両立を実現し、新たな成果を積み上げていくことでしょ。



デザイン工学部デザイン工学科4年

櫻井 響来さん

工学部電気電子工学課程先端電子工学コース1年

東坂 柗哉さん

システム理工学部数理科学科1年

小林 樹さん

空手道部

楽しむ心を大切に

2025年10月13日に日本武道館で行われた第68回関東大学空手道選手権大会男子3人制組手で芝浦工業大学が優勝しました。優勝メンバーである櫻井さん、東坂さん、小林さんに大会や普段の活動について振り返ってもらいました。

Q 今回の大会は、特別な舞台である日本武道館での開催でした。この憧れの舞台に立った感想はいかがですか。

櫻井…今回の大会は自分にとって引退試合だったので、武道館は、普通に空手をやっていてもなかなか立てる舞台ではないので、最後に武道館に立てて本当に良かったな、思い出に残ったなと感慨深く思っています。

東坂…武道館は全日本大会に出るような憧れの選手が立つような舞台だと思っていたので、1年生の時からそのような場所で試合ができたことに感動しました。最初は緊張で体がガチガチで動けなかったのですが、試合をしていくうちに徐々に慣れていきました。

小林…以前、空手の世界大会が武道館で行われていた時に、父と一緒に武道館に訪れたことがあり、すごく憧れがありました。その憧

れの環境で試合ができたことが、本当にうれしかったです。

Q 今回4年生の櫻井さんと1年生2人のチームでしたが、最高学年として、チームの結束を強めるために意識していたことはありますか？

櫻井…大会で「勝つこと」を目標にするというよりも、大会一つ一つを楽しむことを常に意識させていました。今回もそれを実践していたので、みんなが楽しんで大会を終わったと思います。

Q チームとして空手を「楽しむ」ことを大切にされていますが、空手が楽しいと感じる瞬間はいつですか？

東坂…大会で勝つことも楽しいですが、それよりも練習でみんなと日々努力していくことが楽しいと感じています。日々、互いにアドバイスをしあいながら練習をすることができています。

小林…監督や先輩方に教えていただいた、自分の課題を克服して乗り越えていく過程がすごく楽しいです。日々注意された点に集中しながら、「楽ではないが、楽しい」

という充実した練習を行うことができている。

Q 空手の経験が大学の学業や研究に活かしたエピソードはありますか？

小林…組手は「正解がない」競技と言われていて、先生や先輩方の組手を見て吸収することが多角的な視野で研究することが大事になります。学業において、一つの問題に対して多面的な方向でアプローチしていく考え方が身についたのは空手のおかげだと思います。

Q 最後に、4月に開催される東日本大会に向けた抱負や今後の展望について一言お願いします。

櫻井…自分自身は卒業してしまうのですが、後輩の二人には緊張せず頑張って、大会を楽しんでほしいです。

東坂…自分の満足のいく結果が出るように、学業と部活を両立しながら練習に励んでいきたいです。

小林…自分のできる最善の組手ができるように、大会で浮き彫りになった課題を克服して4月を迎えたいと思います。

芝浦工業大学

第98回創立記念式典および 堀木エリ子氏講演会を行いました

2025年11月4日、芝浦工業大学は98周年を記念し、豊洲キャンパスで創立記念式典を挙行了しました。式では、鈴見健夫理事長、山田純学長の挨拶に続いて、理事長賞・学長賞・教育賞の表彰のほか、特別荣誉賛助員・荣誉賛助員・特別名誉賛助員・名誉賛助員・名誉教授の称号授与が執り行われました。

創立記念式典終了後には、和紙作家として活躍され、本学の評議員も務める堀木エリ子氏による講演が実施されました。講演では、「無限の可能性に挑む」進化する和紙」をテーマに、ご自身の和紙作家としての歩みを通して、伝統と革新が共存する和紙作りの魅力に触れつつ、挑戦することの意義

2025年12月5日、SWCC株式会社と共催し、特別ゲストにヤンマーホールディングス株式会社を迎え、DEEが新たな発想やイノベーションを生み出す力となることを体験するイベントを豊洲キャンパスで開催しました。メインプログラムでは、磐田朋子副学長、SWCC株式会社 代表取締役会長・長谷川隆代氏、ヤンマーホールディングス株式会社 取締役・白藤万理子氏の3名による「超多様性が生むシナジーとは？」をテーマにした特別対談講演会を実施。「超多様性」を、「異なる視点や経験が交わり、ひとりでは生み出せない新しい知や発想を生み出すチカラ」と定義し、それぞれの専門領域や経験を踏まえ、「多様性があるところにイノベーションが生まれる」という観点から特別講演が行われました。締めくくりには、学生に向けて「未知の世界に挑戦し、自分の価値を広げてほしい」「情報をフラットに見て、実を見極めてほしい」「自分を信じ、仲間と協力しながら進んでほしい」との激励のメッセージが贈られました。

また、本イベントでは1日を通して体験型ワークショップや、両社の技術者によるパネルディスカッションも実施され、参加者が多様性の価値について理解を深める有意義な機会となりました。



株式会社堀木エリ子
アンドアソシエイツ代表
堀木エリ子氏



「DEE×技術がイノベーションを創出することを体感しよう！」特別講演会を開催

講演が行われました。締めくくりには、学生に向けて「未知の世界に挑戦し、自分の価値を広げてほしい」「情報をフラットに見て、実を見極めてほしい」「自分を信じ、仲間と協力しながら進んでほしい」との激励のメッセージが贈られました。

また、本イベントでは1日を通して体験型ワークショップや、両社の技術者によるパネルディスカッションも実施され、参加者が多様性の価値について理解を深める有意義な機会となりました。



左から磐田副学長、長谷川氏、白藤氏

第53回 芝浦祭「アメリカンレトロ」に 2万1000人が来場

2025年10月31日から11月2日の3日間、第53回芝浦祭が豊洲キャンパスで開催されました。今年のテーマは「アメリカンレトロ」。若い世代には新鮮さのなかでどこか懐かしさを感じさせ、年配の世代には過去を思い出させるような魅力をもつこのテーマには世代を問わず本祭を楽しんでほしいという思いが込められています。本祭には3日間で延べ21669人の方々が訪れ、学生だけでなく地域住民や子供たちの姿も多く見られ、大盛況でした。野外ステージではビンゴ大会や

お笑いコンテストが開催され、会場は多くの来場者でにぎわいました。大講義室ステージでは吹奏楽やバンドによる演奏、ジャグリングパフォーマンスなどが開催され、多くの観客を魅了しました。また、屋台や教室ブースでは部活動・サークルなどの課外活動団体が、バラエティに富んだ企画で来場者を楽しませていました。キャンパスには大学公式マスコットキャラクターのテクシバくんも登場し、たくさんの子供たちと触れ合いました。



坂茂特別招聘教授が、アメリカ建築家協会 「2026年AIAゴールドメダル」を 受賞しました

2025年12月4日、アメリカ建築家協会(AIA: The American Institute of Architects)が優れた建築家に贈る「AIAゴールドメダル」の2026年の受賞者に、坂茂特別招聘教授(建築学部)が選出されました。2026年6月にアメリカサンディエゴで行われるAIAコンファレンスで授賞式が予定されています。

AIAゴールドメダルは「建築の理論と実践に永続的な影響を与えた個人」に贈られる賞で、フランク・ロイド・ライトやル・コルブジエなどの著名建築家がこれまでに受賞しています。日本人の受賞は、丹下健三、安藤忠雄、槇文彦の各氏に次いで4人目となります。

AIAは選出理由について、紙や木材などを用いた災害用シェルターの設計などを通じて「強靱で持続可能な建築を生み出し、建築界に革命をもたらした」点を挙げています。

なお、今回の受賞理由の一つになっている紙管を使った建築手法は、豊洲キャンパス本部棟1階のレストランにも取り入れられています。

また、2025年11月には、日本の文化の発展に長年にわたり多大な貢献を果たした人物が顕彰される文化功労者にも選出されました。AIAゴールドメダル受賞とあわせて、坂茂特別招聘教授の建築活動が国内外において高く評価されていることを示しています。



芝浦工業大学

大宮キャンパスに新校舎「9号館創発棟」が完成

大宮キャンパスに2025年12月19日、地上7階建ての新校舎「9号館創発棟」が完成しました。この校舎は大宮キャンパスの再整備プロジェクト「O-CAMP 2027」の一環で建設したものです。

2022年に政府が示した特定成長分野「デジタル」「グリーン」「Well-being」を拡充する研究施設、ラーニングコモンズ、地域に開かれた「地域健康増進センター」と産学官金連携コーナー、体育館やe-スポーツ用の施設を整備しています。「多様な分野の学生や研究者が集い、交流し、協働することとで新たなアイデアやイノベーションを生み出す」という新校舎に期待される機能や理念を表現した「創発」を用いて、呼称を「創発棟(英語: Emergence Hub)」と定めました。

今後外構の工事が終わった後に、校舎前に広場が整備されます。システム理工学部の建築・環境課程や生命科学課程 スポーツ工学コースなどの研究室の入居が予定されており、本格的な利用開始は4月を予定しています。

プロジェクトとしては2023年11月に4号館前斜面の林を整備した「芝生広場」に続く第二弾です。今後は第一体育館の解体、2027年には跡

地に新しい食堂・購買棟の完成、さらに現在の食堂・購買棟の跡地に新たなキャンパスエントランスを整備——と続いていく予定です。

施設概要

名称	9号館（創発棟、Emergence Hub）
建設地	埼玉県さいたま市見沼区深作 307
敷地面積	44,796.70㎡
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
階数	地上7階
延床面積	21,720.63㎡
建築面積	6,514.82㎡
基本設計・工事監理・監修	株式会社安井建築設計事務所
実施設計	KAJIMA DESIGN
施工	鹿島建設株式会社



大宮キャンパス新食堂・購買棟の名称・計画・事業者が決定

大宮キャンパスの再整備プロジェクト「O-CAMP 2027」として進める「食堂・購買棟整備事業」について2025年11月、学校法人芝浦工業大学の理事会で食堂・購買棟の名称と事業者、計画が決定しま

した。この事業は第一体育館を解体した跡地に新しい食堂・購買棟を建設してカフェテリア・生協購買店舗を移転するものです。キャンパス中央に位置することから、5号館・6号館方面からのアクセス改善が見込まれます。

工事期間は2025年12月から2027年2月までを予定しています。キャンパスを貫くケヤキ並木からも見渡せる開放的な建物は木造2階建てで、延べ面積の合計は2582㎡。ケヤキ並木側には食堂と厨房、第二体育館側には購買とその2階に屋外テラスが設けられます。食堂は現在から約200席増加予定で、混雑の緩和も期待されます。

また名称は「O-BASE」に決定しました。キャンパスの中心に位置

し、単なる食事の場を超えたコミュニティハブとしての役割を果たす「拠点」に整備していきます。なお営業は、2027年4月からの予定です。



エントランスイメージ（右手奥が齋藤記念館、左手が5号館側）



ケヤキ並木（2号館）側イメージ



購買イメージ



食堂イメージ



配膳スペースイメージ

芝浦工業大学附属中学高等学校

附属中の特別探究プログラムが 日産財団理科教育賞「優秀賞」を受賞

芝浦工業大学附属中学高等学校の金森千春教諭と關沢千穂教諭による特別探究の取り組みが、2024年度日産財団「理科教育助成」の対象となり、特に優れた成果が認められたことから、このたび2025年度理科教育賞「優秀賞」(副賞50万円)を受賞しました。

日産財団の理科教育助成は、小・中学校における理科教育を支援することを目的としたもので、特に優れた実践には理科教育賞が授与されます。今回の受賞テーマ「科学的に探究する力と批判的に思考する力を育成する教科横断型授業ープラスチックは本当かー」に悪なのかー」は、生徒の探究意欲を高め、



主体的な学びを促した点が高く評価され、大賞に次ぐ受賞となりました。

授賞式と合わせ実施されたインタビューで金森教諭は「教科書どおりでない授業を設計する楽しさを、他の教員にも味わってほしい」と語り、關沢教諭は「今回の研究データをもとに生徒を巻き込んでさらに研究を深めていきたい」と意欲を示しました。最後に柴田邦夫校長は、両教諭の熱意と行動力に対して敬意を示すとともに学校全体の活性化に期待をこめました。



附属中高で英語プレゼンテーション コンテストを実施しました

2025年11月22日、附属中学高等学校で、英語プレゼンテーションコンテストを実施しました。本行事は同校が男子校だった頃から続く伝統行事であり、社会の変化に対応し、「英語で考え、伝える力」を育てるための機会として進化を続けてきました。

プレゼンテーションでは、自分のことや学校生活のこと、社会問題や将来のことなど、自由に語ってもらいました。中学1年生から高校2年生までの男女生徒計44人が発表し、英語の発音だけでなく、アイコンタクトや話の間の取り方まで磨き上げた発表を披露しました。

審査員として同窓会会長豊田氏、卒業生田中氏の協力を仰ぎました。さらには、中高大連携の一環として参加した芝浦工業大学工学部で英語科目を担当する村上嘉代子教授は、「中学生は主に身近なテーマを題

材に、自分の経験や考えを率直に伝えており、学年が上がるにつれて内容や構成の深まりが感じられました。特に高校生は、社会的課題を題材にデータ分析を交えた説得力のある発表も多く、大学での学びにつながる力が着実に育まれていることを実感しました。今後の皆さんのさらなる成長が楽しみであると同時に、大学における英語教育の在り方についても前向きに考えさせられる機会となりました」と感想を述べました。



芝浦工業大学柏中学高等学校

「第36回おぐいお茶新俳句大賞」 中学生の部 大賞受賞

株式会社伊藤園が主催する「第36回おぐいお茶新俳句大賞」中学生の部で伊藤来実さん(中学3年生)の詠んだ句「夕焼けのしっぽつかんで 立ち話」が大賞を受賞しました。本校では、国語の授業の一環として、毎年全校生徒が俳句を創作し、同賞へ応募しています。伊藤さんはこの句で、冬の夕暮れ時、部活帰りに友達と別れる際の「まだ話したい」という思いと、日が暮れていく情景を表現しました。創作にあたり、「しっぽ」という言葉は序盤から浮かんでいたといい、『しっぽつかんで』という表現に至るまで、一文字の違いで自分の気持ちがどう伝わるのかを最後まで考え抜きました」と振り返りました。

中学生の部・応募総数約48万回の中から選出については、「最初



は驚きが大きかったですのですが、表彰式や表敬訪問を通して、少しずつ賞をいただいた実感が湧き、今は純粹にうれしい気持ちでいっぱいです。審査員の先生から『しっぽ』しっぽつかんで』という表現を評価していただき、伝えたいと思った思いが届いていたことがとてもうれしかったです」と喜びを語りました。

伊藤さんの句は今後、「おぐいお茶」シリーズのパッケージに掲載され、サーバーをはじめとする全国の店舗に並ぶ予定です。

第1回エコチル調査全国フォーラムで、 中高生21人が研究成果を発表

2025年11月2日に環境省主催で開催された「第1回エコチル調査全国フォーラム」に、中学生18人・高校生3人の計21人が参加しました。

本フォーラムは、子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)の意義や成果を広く発信することを目的としたイベントです。本校生徒はその中の「エコチル調査発表会」に参加し、口頭発表の部およびポスター発表の部で、環境と健康に関する研究成果を発表しました。

今回の発表では、中学生は全国中学校Webコンテストに向けて進めてきた研究を、高校生は探究活動を通して深めてきた研究を、それぞれ堂々と披露。その結果、多くのチームが非常に高い評価を受け、環境省環境保健部企画課長賞をはじめ、上位賞に選ばれたという大変素晴らしい成果を収めました。

本校出場生徒と受賞結果

	演題	発表者	賞
口頭発表	外来生物を活用する方法について	中学生 藤田快成、渡邊拓篤	環境省環境保健部企画課長賞
	ヒトゴトにしない「観光地のゴミ問題」	中学生 伊藤来実、國武陽太、川田真大、藤井然	環境省環境保健部化学物質安全課環境リスク評価室長賞
	藻類の可能性→健康と環境を支える小さな力～	中学生 中村友奏、石川涼帆、千嶋彩花、戸部花音、古川結梨	優秀賞
ポスター発表	バイオマスの展望と地域循環型社会の形成について	中学生 田中なつみ、曾良中大雅、丹澤凜太郎	優良賞
	地球温暖化による気温変化が日本の特定地域のヒトスジシマカの分布にどのような影響を与えるか	高校生 前田結衣、櫛方咲花	優秀賞
	ドラッグ・ロス、ドラッグ・ラグへの対策と薬害の対策の両立	高校生 中尾凌	優秀賞
	観光客が楽しくて、現地の人は住みやすいそんな環境に向けて	中学生 守屋崇秀、上田怜奈、杉谷佳音、森永晴太、清水翔	



芝浦工業大学

SHIBAURA INSTITUTE OF TECHNOLOGY
Established 1927
Tokyo

Shibaura Institute of Technology

100th
Anniversary

100周年記念事業
ご寄付のお願い



X
芝浦工業大学
公式アカウント



Instagram
芝浦工業大学
公式アカウント



YouTube
芝浦工業大学
公式アカウント



TikTok
芝浦工業大学
公式アカウント